

英吉利經濟學における二つの價值概念

大 熊 信 行

1

近代經濟學にはゆる價值論なるものの輪廓を、對立する諸學派の根本思想の發展および綜合として眼に見え
るやうに描きだすのは、容易のことでない。現代の經濟學を代表する著作の、いくつかの體系についてみれば、
それらは純粹に一つの系統をひいてゐるといふよりも、むしろ對立する學說の綜合として成立してゐることは事
實である。その意味では、近代經濟學における價值論上の對立は、十九世紀の末葉以來、大いに緩和されつゝあ
つたのであつて、現代の理論經濟學者の多くは綜合論者であるといふことができる。過去の價值學說にたいする

かれらの見解は、根本的にはむしろ合致しつゝあると見るべきふしが多く、たゞ、いかにして前時代の諸學說を、綜合的に、發展的に、體系化するかといふ方法において、それぞれ趣きと出來ばえを異にしてゐるのみである。

近代經濟學における價值論の對立といへば、いふまでもなく客觀學派と主觀學派の對立を、つまり費用學派と利用學派（效用學派、限界學派）の對立を、意味するのであるが、諸國の有力な理論經濟學者の多くがいづれも綜合論者であるといふことは、もはや單なる費用學派でも、單なる利用學派でもないといふこと、つまり單純なるオーストリア學派や、單純なるイギリス古典學派の系統といふものは、現代には稀であるといふことを意味する。

たゞ、ここに一學派の系統を純粹に支持せんとして過去半世紀にわたり、一古典の擁護をつゞけてゐる若干の學者があり、この國においても同様の態度を一部の研究者のあひだに認めることができる。それをマルクス學派と呼ぶならば、マルクス學派なるものは、價值論については、カール・マルクス *Karl Marx* の業績をもつて、いはば科學的完成物とみなし、その深化乃至發展の必要と可能とを肯定しないひとびとである。さうした態度の持續が、科學的研究のいかなる他の分野においても、見ることできないものであること、また、科學的精神と矛盾したものであることは論ずるまでもないとおもふ。この態度は、一定の政治的實踐の必要に結びつけられたものとして理解されるのみ。マルクス主義が、内に一箇の『科學』を包藏しながら、全體としては『科學』を超えたものであるといふことが理解されないかぎり、マルクス學派の態度は不可解なのである。で、この學派が自己の純粹を保つべく、マルクス以前の『ブルジョア經濟學』すなはちアダム・スミス *Adam Smith* やよびデーヴット・リカード *David Ricardo* の勞働價值説と、マルクス自身のそれとの懸隔を強調しなければならなかつたことは

自然であるとして、さらにマルクス没後、經濟學の基礎的な諸問題について、あたらしい論敵を迎へなければならぬ運命にもあつた。その敵とは、マルクスをも引きくるめたイギリス古典派全體の價值論を顛覆せんとする氣勢を示しつゝ、一八七〇年代に興隆したオーストリア學派である。この學派は、いはゞ新らしき『ブルジョア經濟學』であるから、この經濟學を批判することが、マルクス學派の當然な課題の一つでなければならなかつた。事實において、それは決して餘蘊なくおこなはれたといふことはできない。まゝまつたものとして、ニコライ・ブハーリン N. Bucharin に一箇の批判書があり、それが比較的ひろく行はれたのみである。わけてマルクス學派が警戒を嚴にしたものは、この新しき經濟學とマルクス經濟學とを調和せしめようとするいろいろの試みであつた。そのやうな試みは時としてはマルクス派の内部に、より多くの場合においては外部に、おこなはれたのである。ツガン・バラノウスキイ Tugan-Baranovsky の綜合説はロシアにおける一例であり、ブハーリンは、この試みをマルクス主義の立場から見て、最も『有害な』ものとし、右にあげた一書の附録で、これに批判を下してゐる。いま、マルクス學派の態度を論外におけば、現代の經濟學が費用・利用兩學派の業績を綜合することに、自己の課題を見いだしたといふことは事實なのであつて、最近數十年間、この課題は斯學研究者が一應避けることのできない歴史的番組であつたといつてもいい。もしさういふことができないとすれば、すくなくとも日本の國內的事情ではその通りだつたといはなくてはならない。

價值論上の果てしない論争を解決する道は、第一段として、まづ對立する兩學説を個別的に正しく理解することから、はじめなければならぬ。だが、實際上および學問上、同一の用語が、いろんな意味にもちゐられて

ることから生ずる紛はしさが、一部の研究者を混沌のなかに陥れたことも事實である。おそらく、このことからして、價值問題の解決は、事實において二つの方向をとることとなつた。一つは困難を克服するところの綜合への道、もう一つは價值論そのものの放棄である。後者を選んだものに、現代有数の學者があることも見すぐることができない。そのやうな價值論の放棄が、經濟學の體系樹立のために、新らしい成功をもたらしたといふ印象があるにいたつては、研究者の注意は一層緊張せざるをえない。價值論放抛の顯著なる主張者の一人は、祖國に學問の傳統をもたなかつたスエーデンの學者グスターフ・カッセル Gustav Cassel であり、かれの主張に左袒し或は傾聽するものは、この國においても少くない。

科學の傍觀者としては、かうした現狀を、あるがまゝにながめてゐれば足りるわけであるが、身みづから科學の領域に踏みいり、科學者として何等かの作業に従事しようとするかぎり、まづ價值問題にたいする自己の見解を確立することなしには、何一つ筋道の立つた仕事を果たしうる見こみはないであらう。經濟學の研究を志すものは、まづ價值の學理をまなべ。それを放棄すべきか否かは、しかるのちの問題である。ありていにいへば、價值問題なるものは、その根本的な部分では、もはや未解決のまゝ残された点は殆ど存在しない。現代の有能な學者たちは、そのやうな部分について論争を繼續するのは無用であると信じてゐる。そこになほ未決問題があるといふ見解は、むしろ過去の論争史の諸印象に囚はれすぎた頭腦のなかに生残つてゐるにすぎない。だが、ここで注意を要するのは次ぎのことである。いかにも價值問題は、その理論の基本的な部分の對立では、綜合の可能が示されてゐる。しかし、それは經濟學研究の出立點に立つ者が、右の事實を承認さへすれば、先の問題にすん

でもよくなつたといふことを意味するものではない。その問題がいかにして解決されたかといふことの會得なしには、經濟學の研究は正しく前進しえないのである。この意味で、經濟學のあたらしい研究者は、學者がすでに爲しとげた到達點をもつて、たゞちに自己の研究の出發點とすることはできない。おのれもまた、前代の學者だちの出發點まで溯ることによつて、そこから、これらの思惟の成果を跡づけて來なければならぬ。そのやうにして、はじめて、現代の科學の到達點がいかなる性質のものであるかが正當に理解されるのである。このことは經濟學にかぎらず、哲學その他の科學的領域においても、おなじことであらう。經濟學の研究が、事實上、經濟學史的研究を伴ふことなしに、十分な成果を挙げえないだらうといふこと、——實驗成績をもたないこの科學領域において、いかに古典研究が現實的な意義をもつかといふことも、右の点から想像しうるところである。そこで、經濟學の勉強といふものが、檢定試験の準備でなく、一つの科學領域にみづから飛びこまうとする志であるばあひには、第一に必要なのは教科書の勉強に別れをつけることである。オリヂナルな文獻に直接ぶつかったところから、われわれの眞の理論的思惟がはじまるのである。科學上の『獨創』といふ言葉は、はなはだ誤られやすい。科學においては、およそ科學的眞實を離れて獨創はないといふ一事を知るぐらゐる重要なことはない。一つの科學的著作が獨創的であるといふことは、これまで見られなかつた新用語や新理論や新體系の樹立がそこにあるといふことではない。たんにそれだけのことならば、この國にも經濟學的獨創はいくらでもあるのである。獨創とは科學的眞實の把握であり、また、その展開でなければならぬ。およそ科學的眞實なるものは、個々別別の著作にいかにも個々別々のものとして存在してゐるやうに見えやうとも、それが同一科學の領域内におけるも

のであるかぎり、遠かれ近かれ、かならず互に脈絡を有する性質のもでなければならぬ。もし互に脈絡がないと見えるならば、まだ學者が脈絡を辿りえないのだと考へらるべきである。およそ一つの科學領域内では、眞實は一つの全體として考へられ、その全體は永久に到達されないが、存在するものとして豫定されなければならぬ。箇々の學者の作業は、その全體について、おほむね部分的眞實をとらへようとしてゐるのである。一箇獨立の科學としての經濟學の現狀は、そのやうな部分的眞實の集大成以外のものでない。もちろん、學者は、しばしば體系的な企てを示し、そのやうな部分的眞實の集大成を整理して、經濟學的眞實の全體性を明かにしようとする。これを、經濟學的眞實は一つの全體でなければならないといふ理念の表示、および、それへ到達しようとする努力の成果として見れば、そのやうな諸體系は存在理由をもつけられ、それは科學的眞實の全體が永久に到達すべからざる或るものだといふ智慧を前提したうのことである。教科書的な著作の避けがたい弱點は、その平板な記述が讀者の理論的思索を刺戟する魅力を缺くのみならず、時としては箇々並立した學理を並置のまゝ讀者に示して正しい解決をあたへず、また、時としては、逆にあらゆる問題が解決されてゐるかのやうな觀をあたへることである。であるから、科學的獨創とは何を意味し、何を意味しないかを、知るためにも、また、一般に教科書的なものと獨創的なものとの感觸上の相異を具體的に知るためにも、また、眞の獨創と氣まゝな『新學說』とを區別する一般の見識をやしなふためにも、そして、科學の進歩がいかに研究の繼承性にもとづくところ大なるものであり、いかに飛躍的發展の困難なるものであるかを知るためにも、直接古典におもむくよりほかに方法はない。理論經濟學の研究をこゝろざすものが、まづ古典とつくまねばならないといふのは、以上の理由から

しても明かである。なかんづく價值問題のやうに二世紀にまたがつて紛糾をかさねた問題に接近しようといふのは、問題の起因をなした古典そのものに即して二三の用語の吟味から始め、どこまでも用語の意味内容の轉變發展をたどるといふ方法によらないかぎり、客觀的な結論に到達することはのぞみがたいのである。この一文の目的は、そのやうな仕方でもつて二三の古典に即し、近代經濟學における價值論上の二用語すなはち使用價值・交換價值の兩概念の成立、およびその變遷の跡をたどるにあり、その直接の結果として、對立する兩學說の接觸點を明白にするにある。この作業は一見して甚だしく季節おくれの觀をあたへるけれど、近時文化主義的世界觀で裏づけられた『價值の體系』を、從來の價值理論の地位に入れかへようとする傾向があり、その傾向はこの國の學者のあひだで著しく目だつてきてゐる事情があるので、そのやうな趨勢にたいする批判の根據を明かにするために、この作業は當面の意義をもつであらうと信じられる。

2

近代經濟學の理論的な諸問題が、はなはだ多くアダム・スミスの著作に胚胎してゐることは、いまさら指摘するまでもないが、價值論においても、そのことは例外をなすものではない。かれは『國富論』第一篇第四章『貨幣の起原および使用』の末節に近いところで、つぎのやうに述べて、價值問題にはいる用意をととのへる。――

The word VALUE, it is to be observed, has two different meanings, and sometimes expresses the utility

of some particular object, and sometimes the power of purchasing other goods which the possession of that object conveys. The one may be called "value in use"; the other, "value in exchange." The things which have the greatest value in use have frequently little or no value in exchange; and on the contrary those which have the greatest value in exchange have frequently little or no value in use. Nothing is more useful than water: but it will purchase scarce any thing; scarce any thing can be had in exchange for it. A diamond, on the contrary, has scarce any value in use; but a very great quantity of other goods may frequently be had in exchange for it. (The Wealth of Nations, Book I, chapter IV. Cannan's ed. p. 30)

一番さきに斷つておくが、この一節を讀んで、『價值』Value についてのスミスの定義は正しいか、正しくないか、といつて議論するぐらゐ、ばかげたことはないといふことである。スミスのばあひにかぎらず、およそ科學上の用語といふものは、それをどういふ意味にきめるかは、一應、學者の自由であるといふことを承知してゐなくてはならない。一旦、用語の意味をきめたいへで、それをいかに使驅して、どう理論を展開するかが問題なのである。たゞし、科學は客觀性を旨とし、つねに多數の學者の協力をまち、そして幾時代にわたる知識の繼承累積として存在してゐるものであるから、科學上の諸概念を表示する諸用語は、なるべく社會的に一定してゐるに越したことはない。科學上の諸概念は、それ自體不變のものでなくて、發展性をもち、時には不必要となつて廢滅することもあり、したがつて他の概念がとつてかはり、また、新しい概念が追加されることもあるので、新用語が必然にくはゝらざるをえない場合もないのではない。だが、科學上に一つの新用語が導きいられるため

には、その用語になつてゐる新しい概念と、これまでの諸概念との關係が不明確のまゝに放置されてゐることはゆるさるべきではなく、科學上に新用語を導きいれようとするものは、さうしなければならぬわけを十分に説明する義務をおはなければならない。科學上の用語について以上述べたところは、まのあたりスミスの文章を読むために悉く必要な心得ではないが、こゝで一言しておいていゝことである。

さて、スミスの考へるところによれば、實際にひとびとが『價值』valueといふ用語を日常つかふのを見ると、二つの場合がある。人々は氣づかずに、或るときは一つのことを意味し、或るときは他のもう一つのことを意味してゐるといふのである。もちろん、これは十八世紀のイギリスについて、スミスが觀察したところであるのはいふまでもないが、さういへば、現代の日本についてみても、日常用語としての『價值』といふ言葉が、いろいろがつた意味にもちゐられてゐることは事實である。スミスは、そこで、二つのちがつた意味（概念）を區別するために、たんに『價值』と呼ぶのをやめて、一方を『使用價值』value in use、他方を『交換價值』value in exchangeと呼んでもいゝだらうといふのである。こゝにおいて、この二つの用語は日常用語のまぎらはしさをぬけだし、ともかくも『價值』といふ用語の二つの意味を別々に明示することとなつたわけである。すなはち科學的分析への第一歩である。注意すべきは、スミスの考察がまづ現實的な日常用語にふくまれてゐる實際的な意味に即してゐること、かれ自身の氣まゝな概念構成に走らないといふことである。

價值といふ用語の實際にもちゐられてゐる意味が、二つにわかれるとして、その意味を、『使用價值』、『交換價值』といふ二つの用語でいひあらはすとして、さて、いよゝ經濟學上の問題は何かといふと、二つの價值のあひ

だに、何等かの關係ありやなしやといふことである。關係ありとすれば、そはいかなる關係であるか、といふことである。この二つの價值は、いづれも價值とよばれてゐる範圍において、言語上の同類にすぎないのか？ それ以外に何等かの關聯がないのであるか？ われわれはその答をもとめるまへに、スミスが右の二つの用語によつて意味したものが事實何であるかを、もつとたしかめておかななくてはならない。しかるに、二つのうち、『交換價值』の意味は、その解釋に何等の困難もない。問題なのは『使用價值』の意味である。『最大の使用價值をもつものにして、しばしば交換價值を全くもたず、あるひは殆どもたないものがある。……水のごとく有用なるものはない。だが、それでは何を購入することもむづかしい。』さうスミスがいふときに、かれが意味する使用價值とはいかなるものであるか？ それは貨物の交換價值と無關係なる或るもの、つまり、貨物の交換價值に影響するところなき或るものだといふことがわかる。スミスが水の使用價值といつてゐるときに、かれのあたまにうかんでゐるのは、一般に水といふものであり、あるひは全體としての水である。その全體としての水は、このうへなく有用なものであるが、交換價值をもたない。これはまさしく事實である。後代の學者には、このスミスの使用價值概念をもつて、限界利用學派の『全部利用』total utilityの概念にあてはまるものだと解してゐるものもあるが、あたらずといへども遠からず、とはいへよう。貨物の『全部利用』とその交換價值とのあひだに直接の關係がないといふことは、限界利用學派がアダム・スミスより一世紀おくれで、あきらかにしたことがらである。しかるに、スミスの使用價值概念が、『全部利用』の概念とをつくり照應するといへないことは、つぎのことによつて示されてゐる。——『ダイヤモンドは、反對に、ほとんど使用價值をもたぬ。しかも、他の貨物の非常

に大きな分量が、しばしばそれとの交換によつて得られるのである。』このことばを通してみると、スミスの使用価値概念は、むしろ經濟學者以外の思想家によつて、もちゐられることのある『人生價值』といふ概念、またはそれに近い概念であるといふ觀をあたへる。『人生價值』といふのは、いはば『經濟價值』（つまり『交換價值』）に對立せしめた概念であつて、倫理的・審美的價值、あるひはジョン・ラスキン John Ruskin の『眞實價值』 Intrinsic Value とでもいふべきものを意味するのである。

いかなる人も、あらゆる財貨について二重の評價がありうることを經驗上知つてゐる。その一つは經濟的な評價、他の一つは經濟的な評價を離れた『人生的な』とでもいふべき評價である。この二つの評價は並行一致するばあひがあるかとみると、また、矛盾するばあひもある。人々に注意を要求するのは、もちろん第二の場合であり、アダム・スミスの興味を喚起したものも、それである。かれは水とダイヤモンドの例をあげて、價值の逆説を指摘はしたが、その逆説を釋くことはできなかった。そこで、それを釋いたものが限界利用學派であると普通にははれてゐるが、限界利用學派といへども、この意味の價值の逆説を釋きあかしたといへるかどうかはうたがはしい。スミスの提起したものが、人生價值と經濟價值との矛盾といふ問題だとすれば、この問題を釋くためには、經濟理論的な道具だけでは足りないやうにおもはれるからだ。いづれにせよ、われわれはこゝでスミスの使用価値概念がいかなるものであるかを決定するだけで満足しなければならない。第一に、それは交換價值から區別された別箇の價值である。第二に、それは交換價值に影響するところもなく、貨物の交換價值が成立するために、缺くべからざる要素または條件としてすらも考へられないところのものだといふことになつた。しかるに、

スミスが正當にも研究しようと思つてゐるものは、貨物の交換價值であつて、使用價值ではない。いかにも使用價值の研究といふものは、後代におよんで一つの學派（使用價值學派・限界利用學派）を形成するまでに發展してゐる。しかし、いかなる經濟學派でも、使用價值のための使用價值の研究に終始して満足すべき理由は無い。使用價值の分析なるものは、それが交換價值の説明に役だつといふ窮極的な目的にかゝはらしめてのみ、——ただ、その範圍においてのみ、存在の權利をもつのである。そして、だから、それがいかに交換價值の諸現象を一般的に説明しうるかといふ程度および範圍によつてのみ、その科學的意義が決定されるのである。使用價值の研究といふものが、イギリス古典學派において、放置されてゐたのは、それが交換價值の説明に役だつものと思はれてゐなかつたことにもとづくのであるから、そのかぎりにおいて、古典派のとつた態度は正しかつたといはなくてはならない。（いま、ここで、このことをことさらいふのは、使用價值そのものゝ分析をこころざした新しい學派の一部のものが、經濟學に固有の課題が交換價值の分析にあることを忘れたかのやうに、使用價值そのものゝための使用價值の分析や、人間心理の研究などに走つたのは、今日から見ると行過ぎであつたと考へられるからだ。スミスは一旦『使用價值』といふものをとりあげたが、それをふたゝび放棄した。つまり『使用價值』は、交換價值と無關係のものらしいといふ理由で、經濟學的研究のそとへ逐ひだされた。しかも、この点において、かれの功績ともみるべきは、——妙な見方であるが、『使用價值』といふものを一旦とりあげてみせたことである。この用語を直ちに承けて、その意味内容を科學的に限定したものこそ、のちに述べるごとくデーヴィット・リカードである。それのみではない、リカードは使用價值と交換價值とのあひだに一定の關係を設

定した。今日から見れば、まことに素朴な形ではあるけれど、これをスミスのばあひと比較してみると、まことにたしかな進歩だつたのである。

3

さて、アダム・スミスは、右のやうに『價值』といふことばの用語例を二つにわけたうへで、『交換價值』をもつて、かれの研究題目とする。そして、ふたたび『使用價值』にふれようとはしない。さきに引用した一節につづけて、かれは直ちにいふ。――

In order to investigate the principles which regulate the exchangeable value of commodities, I shall endeavour to shew,

First, what is the real measure of this exchangeable value; or, wherein consists the real price of all commodities.

Secondly, what are the different parts of which this real price is composed or made up.

And, lastly, what are the different circumstances which sometimes raise some or all of these different parts of price above, and sometimes sink them below their natural or ordinary rate; or, what are the causes which sometimes hinder the market price, that is, the actual price of commodities, from coinciding exactly with what may be called their natural price.

貨物の交換價值を支配する諸原理を研究せんがためには、第一に、交換價值の眞の尺度 *real measure* が何かといふ問題、いひかへれば一切貨物の眞實價格 *real price* を構成するものは何かといふ問題、第二に、この眞實價格が構成せらるゝ種々なる要素は何かといふ問題、第三に、右にいふ價格の一部または全部を、時として引上げ、時としてそれらの自然的または通常的な率以下に引下げる原因は何か、いひかへれば、諸貨物の現實の價格たる市場價格 *market price* が、自然價格 *natural price* に正確に一致することを妨げるものは何か、といふことを説明すべく努力しよう。

われわれはこゝで、スミスが自分の課題とするところのものが何であるかを、一應明確に示される。科學においては、問題の提出そのものが、しばしば重要な意義をもつと同時に、問題提出そのものが、意義をもたない場合もある。右のうち、第一の『交換價值の眞の尺度』は何かといふやうな問題のごときは、まづ問ふにさきだつて、答のあるべきことを豫期してゐるけれど、そのやうな豫定がゆるさるかどうか、實は第一に問題なのである。こゝで、スミスが『眞の』*real* といつてゐるのは、『表面上の』または『實際上の』といふ意味にたいして、『本質的の』といふやうな意味をあらはしたつもりであらう。貨物の交換價值の尺度として、實際にもちゐられてゐるものは、いふまでもなく貨幣である。しかるに、貨幣は交換價值の尺度として、もちろん完全なものではない。貨幣以外に、價值（交換價值）の理想的な尺度がなければならぬといふのがスミスの思想であり、これはそれを人間勞働にもとめたのである。だが、人間勞働といふものは、箇々の具體的な形態としては、べつだ

ん貨幣以上に貨物の交換価値の尺度たりうるやうなすぐれた特徴をもつたものではない。そこで、抽象的に考へられた人間労働をもつて、交換価値の尺度と考へてみてもかまはないが、そのやうな思想は、いはゞ一箇の哲理たるにとゞまつてゐるわけである。スミスは、この問題に關するかぎりでは、一箇の哲理を説いたのであつて、現實の問題を説明したのでなく、価値尺度として貨幣にかはるべきものを提案したのではない。

スミスの考へるところによると、第一、それみづからたえず価値の變動するものは、他の諸貨物の価値の精確な尺度たりえない。第二、そこで、ひとり労働のみが交換価値の眞の尺度である。第一の命題は、交換価値がもとと二貨物間の相對的な分量上の比率であるといふことから離れて、そのなかに絶對的なもの、標準的なものの存在を、要求してゐる。もちろん、そのやうなものを要求するのは、思想としてはさまたげないけれど、貨物それみづから価値が變動しないといふことは、スミス自身が先に定義した『交換価値』といふことばの内容から考へて、意味のないことであらう。あらゆるものの価値は變動するのである。で、それでもかまはないから、ひとつ標準的なものをかりに定めて、その標準にたつて、他の一切の貨物との關係を考察しようといふのならいい。その標準的なものとして、人間労働をもつてくるのもいい。だが、それは、人間労働のみ、ひとり価値（交換価値）の變動をまぬかれてゐる（さういふ事實は決してありえない）といふ理由にもとづくのではなくて、別に十分な根據が存在しなければならぬであらう。そのやうな特別の根據を人間労働に求めうるはずであるが、いま、その問題には觸れない。労働のみ、ひとり永久に、その価値（交換価値）が不變である、といふスミスの命題は、『價值』といふ用語の意義をすでに、一變せしめたもので、また、その論證にもちゐられてゐる推理の基礎も、

妥當ではないといふことを指摘するにとどめる。

Equal quantities of labour, at all times and places, may be said to be of equal value to the labourer.

労働の等しき分量は、あらゆる時と所において、労働者にとつて等しき価値のものであるといひうるだらう。

この一文は、『國富論』の第一版では、すこしちがつて、次ぎのやうになつてゐた。――

Equal quantities of labour must at all times and places be of equal value to the labourer.

労働の等しき分量はあらゆる時と所において労働者にとつて等しき価値のものであらねばならぬ。

すなはち『あらねばならぬ』must beといふ斷定が、やはらげられて、『あるといひうるであらう』may be said to beといふ言葉に書き改められたのである。些事であるが、注意に値する。われわれは、スミスがこゝで多少思索上に動搖を呈してゐるらしいことに氣がつく。實際、このばあひ労働者にとつての『等しき価値』といふときの『価値』なる用語の意味は、『交換価値』の『価値』ではなくて、むしろ主觀的な全然別箇の意義を語るのであるから、スミスはみづから心づかずに、用語上のトリックに落ちてゐると認めなければならない。――だが、労働者自身にとつての労働の主觀的性質を考察するなどといふことは、經濟學上の觀念史から見れば、

一般貨物のなかに人間労働を見いだすところのベティ以来の思想より一步をすゝめた近代的思想であり、この點ではむしろアダム・スミスは、非常に妙な言ひ方であるが、主觀學派の労働理論に先鞭をつけたものだといふことさへできるかとおもふ。すくなくとも、一世紀以後にジェズンス W. S. Jevons に見るやうな労働理論の萌芽はスミスに見いだされるといつて差支ない。實にアダム・スミスのやうな思想家の體系においては、その後に近代經濟學を形成した諸理論が、いづれも萌芽の状態において、包藏されてゐたといふべく、この場合にかぎらず、それらのなかには、後日にいたつて對立すべき運命にある理論すら、おなじ母胎にねむつてゐることができたのである。さて、右の文句における第一版と第二版以後との違ひはともかくとして、スミスが労働をもつて眞の價值尺度としたことに變りはなく、その理由とするところは次のごとくである。以下の文章は、右にあげた一節にすぐつちへ。

In his ordinary state of health, strength and spirits; in the ordinary degree of his skill and dexterity, he must always lay down the same portion of his ease, his liberty, and his happiness. The price which he pays must always be the same, whatever may be the quantity of goods which he receives in return for it. Of these, indeed, it may sometimes purchase a greater and sometimes a smaller quantity; but it is their value which varies, not that of the labour which purchases them. At all times and places that is dear which it is difficult to come at, or which it costs much labour to acquire; and that cheap which is to be had easily, or with very little labour. Labour alone, therefore, never varying in its own value, is alone

the ultimate and real standard by which the value of all commodities can at all times and places be estimated and compared. It is their real price; money is their nominal price only.

原文は實にうつくしく、力づく書かれた調子のいゝものであるが、こゝには二つの考へ違ひがある。こゝでスマスは交換價値の尺度として勞働をあげ、その勞働を窮極の不變の尺度とした根據として、一定量の勞働が勞働者にとつてつねに一定量の犠牲であるといふことを擧げてゐる。二つの考へ違ひといふのは、——第一、あらゆる時所にわたつて、みづから不變なる交換價値の尺度が存在するといふ考。第二、勞働のみが勞働者との關係において一定不變の意義性質をもつといふ考。第一の考が、それみづから交換價値の概念とあひいれないものであることはすでに指摘した。だが、この點を十分納得するためには、經濟學研究者は多少思惟の訓練を必要とするであらう。もちろん、いかなるものも一定量をも價値尺度として定めておくことは人間社會において自由であるが、その特定貨物の交換價値は實際上固定してゐないのである。固定してゐるものがあるとすれば、それは、すくなくとも交換價値ではあるまい。第二に、勞働の一定量が勞働者自身にとつて、つねに一定不變の性質をもつたものだといふ考へ方をゆるすとすれば、おなじ考へ方からして、パンまたは米の一定量もまた健康なる勞働者にとつて、つねに一定不變の性質をもつたものだといふことになるであらう。つまり、勞働者の生活的主觀に立つかぎり、一定量の勞働負擔も、一定量の榮養物も、各時代を通じて變らざる性質をおびたものだといはなくてはならなくなつてくるであらう。さう思つてみてみると、わがスマスの勞働價値思想といふものは、根

本的に支持すべからざるもののごとくである。しかるに事實においては、スミスの思想はリカードおよびマルクスによつて繼承發展せしめられてゐるのであるから、勞働價值思想は右のやうな批評の仕方でもつて、すぐ崩れてしまふやうなものでないといふことを知らなければならない。すなはち、價值尺度の問題ならびにその解答を悉く撤去してしまつても、まだ勞働價值理論の實體といふものが残つてゐるといふことになるのである。

スミスの勞働價值思想の根柢におかれてゐるところの以上のごとき思辨は、實は經濟學にとつて必要缺くべからざるものではなく、切りすてられていゝ部分だつた。つまり、右の部分を全部きりとつてしまつても、勞働價值思想は成りたつのだ。あらゆるものの中で、勞働のみひとり、あらゆる時所を通じて、勞働者にとつて一定の犠牲であるといふやうなことは、勞働價值學說の科學的發展にとつては、どうでもいいことだつたのだ。そのやうに勞働者の主觀に立ちいることは、むしろスミスにはじまつて、スミスに終つたもので、勞働價值學說のその後の發展は、さういふことを再び問はうとしない。かへつて、さきに一言したやうに、後日にいたつてゴーッセン H. H. Gossen を初め、限界利用學派の系統のなかに、おなじ思想の著しい理論的發展を見、そして新學派は一應獨特の勞働理論をきづきあげたのである。しかし、この學派の發展からいふと、さうした勞働理論をもつことがまた、學派の純粹性を高めるゆゑんでないといふ見解を生じ、たとへばアルフレット・アモン Alfred Amonn のやうな人は、スミスの勞働價值學說の體臭を伴つてゐるゴーッセン以下の初期限界利用論者を低く評價し、その匂ひを失つたものを、この學說の高き發展であると見てゐるのである。こゝは注目すべき點だとおもはれる。とい

ふのは、ある意味では、ゴッセンのやうな初期限界利用論者の方が、かへつて獨創に富み、思想もゆたかであり、また、勞働價值思想に近似した思想をも抱懷してゐて、對立の意識がなかつたのであるから。この學派が新學說提唱者の意氣に燃えて登場したことは事實だけれど、勞働價值思想にたいする決定的な否定者としての自己認識をもつて登場したのは、むしろボエム・パウルク Böhm-Bawerk 以後のことだといへるであらう。なほ、價值尺度的問題については、これはこゝで深く問ふ必要もないのであるが、スミスはグラスゴー大學教授時代から思索をつづけてゐたもので、大學における講義のノートを見ると、貨幣は『價值の尺度にして交換の媒介物』と定義されてゐたのであるが、國富論になると、單に『交換の媒介』 Medium of exchange として認められるのみで、『價值尺度』 measure of value としては認められてゐない。スミスは云々——

At the same time and place, therefore, money is the exact measure of the real exchangeable value of all commodities. It is so, however, at the same time and place only.

すなはち價值尺度といへば、異なる時と時とにわたる共通の尺度でなければならぬとスミスは考へ、そして、一定時所についてならば、貨幣が立派に價值尺度たることは右に指摘してゐるとほりである。スミスの問題は異なる時と時との間における價值尺度は何かといふにある。勞働價值學說のその後の發展からいふと、この問題が解決する必要のない問題であることはすでに一言したとほりである。しからばこの問題はいかなる意味でも經濟

學上無用の論議に属するかといふに、決してさうでない。スミスの取扱ひ方は、一面哲學的思辨の匂ひを帯びてはゐるけれど、しかもなほそれが實際的必要によつて刺戟されたものだといふことを注意していゝ。つぎの一節は、スミスの關心がいかなるところにむかつてゐるかを示す。――

We cannot estimate, it is allowed, the real value of different commodities from century to century by the quantities of silver which were given for them. We cannot estimate it from year to year by the quantities of corn. By the quantities of labour we can, with the greatest accuracy, estimate it both from century to century and from year to year. From century to century, corn is a better measure than silver, because, from century to century, equal quantities of corn will command the same quantity of labour more nearly than equal quantities of silver. From year to year, on the contrary, silver is a better measure than corn, because equal quantities of it will more nearly command the same quantity of labour.

時を異にする場合の共通の價值尺度として何が適切であるかといふ問題について、その時間の幅の大小(年月)によつて、答がちがはなければならないといふことは、すでにジョン・ロック John Locke によつても指摘されてゐたことである。スミスはロックの考察を更におしよめたものだと思ふことができる。いふまでもなくスミスの答は實際的提案でなくて、理論的な解析である。われわれは再び問ふ、こゝで勞働のみがいつれの場合にいつでも最も正確な價值尺度であると説かれてゐるのは、いかなる根據にもとづくのであるかと。勞働の一定量が

普通の状態における労働者にとつて常に一定量の犠牲であるといふやうな命題が到底やくにたつものでないことは、くりかへして説くまでもない。むしろ注意をむけたいのは次ぎのことである。――穀物も銀も人間労働の一定生産物であり、それらの交換価値の大小・増減は、一般にそれらの生産に必要とされる労働量の大小および増減によつて支配されざるをえないといふ事實である。つまり、このやうな事實の一般的認識こそ、スミスをして労働を眞の価値尺度なりと考へしめた無意識の根據ではあるまいかといふのである。しかるに貨物の交換価値の大小および増減を支配する一般原因として、必要労働量といふものを考へることは、實は価値尺度の問題から轉じて、価値の原因もしくは價值變動の原因の問題を考へることになる。そして、そのやうな考察こそ、まさしく労働價值思想の本質的な部分を構成するのである。

われわれはつゞいて労働價值思想の最も本質的な部分に、つまり『國富論』第一篇第五章から第六章の方へ、移らなければならない。アダム・スミスの價值尺度論は主として右の第五章に屬してゐたのである。第六章の冒頭はつぎのやうな文章からはじまる。これはあとで述べるやうにリカードによつて引用され繼承された部分でもある。――

In that early and rude state of society which precedes both the accumulation of stock and the appropriation of land, the proportion between the quantities of labour necessary for acquiring different object seems to be the only circumstance which can afford any rule for exchanging them for one another. If among a

nation of hunters, for example, it usually costs twice the labour to kill a beaver which it does to kill a deer, one beaver should naturally exchange for or be worth two deer. It is natural that what is usually the produce of two days or two hours labour, should be worth double of what is usually the produce of one day's or one hour's labour.

こゝに近代經濟學の發端にくらゐるウヰリアム・ペティ Sir William Petty 以來の勞働價值思想が、依然として素朴な場合によつてはすゝぶん誤解をまねきやすい形で、述べられてゐるのを見いだす。二日を要する生産物が一日を要する生産物の二倍に値するのは自然 natural であるといふ考察が、つまり貨物相互の交換を支配する原則は、その貨物の生産に必要とされる勞働量であるといふ考察が、こゝでは極めて單純な形において提起されてゐる。單純といふのは二つの意味においてである。第一に、スミスは種々なる貨物を交換するにあたつて人間が遵守しなければならない法則すなはち『諸財の相對價值または交換價值』the relative or exchangeable value of goods を決定する法則の存在を考へ、その法則を説明しようとするのだが、第二に想定されてゐるのは、『資本の蓄積および土地の私有に先だつ原始草昧の社會』である、すなはち前提條件が最も單純な場合である。第二に、さうした前提條件のもとで成立する價值法則の説明がきはめて單純である、諸財の交換を支配する唯一の事由が必要勞働量であるといひ、さうあることが natural であるといふにとゞまつてゐる。いはゞ普遍的な事實そのものを總括して指摘したにとゞまつて、現象としての事實をして普遍的・總結果的にさうならざるをえざらしめ

るところの背後の基本的な經濟的規定および機構が分析されてゐない。讀者は、しかし、スミスのかかる推論に接して、いぶかしさを感じないであらう。なぜか？ この推論にはわれわれの現實の日常經驗に合致したものがあから、——われわれはスミスが前提してゐるやうな單純な社會には住んでゐないけれど、一貨物の生産に二日を要するならば、それは生産に一日を要する貨物の二倍に値するであらうといふのは、大體において、われわれの日常經驗および常識と矛盾しないのであるから。

この鹿と海狸のお伽噺にあらはれた勞働價值思想の精粹たる價值法則は、商品生産社會の基礎的法則として、マルクスまで發展したといふことができるのであるが、しからば交換經濟の原則が止揚された社會（社會主義社會）では、この學理の全構造が無用の長物に歸するであらうかといふ問題を考へてみることも決して遊びではない。そのみならず、アダム・スミスの價值尺度に關する思想は、マルクスに至るまでの勞働價值法則の學說史的發展にたいしては關係のうすいものでありながら、社會主義秩序における價值の問題を考察するにあひになると、この思想は再びスミスが取りあげたとおなじ角度から非常な現實性をおびて登場して來るやうに見えるのである。その消息は、近時いはゆる計劃經濟における『經濟計算』の問題として論争されてゐるところに、うかがふことができる。價值法則の背後にある本質的法則（配分法則）が、スミスにおいて、どこで、いかなる形狀で、述べられてゐるかといふ問題にいたつては、別に十分論じたことがあるから、こゝでは一切觸れない。すでに見た範圍でスミスの價值學說が、どうリカアドオへ傳へられたかを見よう。

デーヴ・リカードはアダム・スミスの説を直ちにうけて、その著作の冒頭にかれの言葉をひいてゐる。——

It has been observed by Adam Smith, that "word Value has two different meanings, and sometimes expresses the utility of some particular object, and sometimes the power of purchasing other goods which the possession of that object conveys. The one may be called *value in use*, the other *value in exchange*. The things," he continues, "which have the greatest value in use, have frequently little or no value in exchange; and on the contrary, those which have the greatest value in exchange, have little or no value in use." Water and air are abundantly useful; they are indeed indispensable to existence, yet, under ordinary circumstances, nothing can be obtained in exchange for them. Gold, on the contrary, though of little use compared with air or water, will exchange for a great quantity of other goods.

Utility then is not the measure of exchangeable value, although it is absolutely essential to it. If a commodity were in no way useful, —in other words, if it could in no way contribute to our gratification, —it would be destitute of exchangeable value, however scarce it might be, or whatever quantity of labour might be necessary to procure it.

これは一見してスミスの説の紹述みたいであり、くり返してしかないやうに見える。つまり、リカードはスミスの説をそのまま肯定し、繼承したのみで、批評もなく修正もないかのやうに見える。だが、それは眞實ではない。

このさりげない祖述のなかに、近代經濟學の一二の基礎概念の確立があるといつて過言ではない。リカアドオは少しもスミスの見解を批評してはゐない。しかるに、かれは暗黙のうちに重大な改善をおこなひ、スミスの使用價值概念を一變せしめてしまつてゐるのである。かれはさうしたと吹聴してはゐない。だが、科學の世界において、われわれのいつも注意すべきは、學者が事實何を爲したかといふことであつて、學者が何を爲さんと志してゐるかといふことではない。科學的作業といふものは、作業それ自體をして語らしめれば十分であり、科學者がみづからその意義を説くのは蛇足にちかい。すくなくとも、そのやうな説明は缺くべからざることからではない。このことを敢て一言するのは、この國における科學的文献には、意圖を喋々しながら、理論的實質においては一定の作業が遂行されてゐない場合を見かける場合がすくなくないためである。リカアドオはまさにその正反對である。のみならず、かれの使用價值概念が、スミスのそれと比較して、いかに科學性をおびてきたかについて、みづから自覺するところが、どの程度のものであつたかすら明かでない。だが、リカアドオのさうした自覺如何といふことは畢竟問題ではないので、たゞ、使用價值概念はリカアドオの著作において、はじめて科學的概念となりえたといふ歴史的事實の決定が重要である。使用價值すなはち利用（效用）utility は、アダム・スミスにおいては、すでに見たごとく交換價值と無關係のものである。しかるにデーヴ^{ハット}・リカアドオによれば、それは交換價值の成立に『絶對的に不可缺』absolutely essential のものである。かれはこの見解を徹底せしめるために語をついで、もし貨物にしてわれわれの欲望充足に資するところが更にないなら、その存在量がいかに稀少であれ、その獲得にいかなる勞働量が必要であれ、交換價值を缺くであらうといつてゐる。一言でいへば、およそ使

用價值を離れて交換價值は成立しえないといふのである。このやうにして、リカアドオは使用價值と交換價值との一定關係を樹立することには成功したけれど、交換價值の大小に照應する使用價值の大小といふ問題に思ひおよびることができなかつた。すなはち、使用價值の大きいさと交換價值の大きいさとは一定關係を見いだしたいものと考へ、利用は交換價值の尺度にあらずといふ言葉で、その考をいひあらはしたのである。果して兩者には並行する一定關係がないだらうか？ この問題に答へるものこそ、のちに來たる限界利用學派なのであるけれど、その新學派はリカアドオによつて遺された部分を解決しようとする態度で登場したものではなかつた。

さて、リカアドオはつゞいていふ。――

Possessing utility, commodities derive their exchangeable value from two sources: from their scarcity, and from the quantity of labour required to obtain them.

すなはちあらゆる貨物の交換價值の成立に絶対に缺くべからざるものは利用であるが、しかし、あらゆる貨物を分けて二種類とし、第一種は稀少性によつて價值の生ずるもの、第二種は勞働によつて價值の生ずるものだといふのである。くはしくいへば第一種は利用と稀少性により、第二種は利用と勞働によつて交換價值が成立するのだが、そのうち利用はいづれも價值そのものゝ成立に與りながら、價值の量的の（大小の）決定にはあづからぬといふことになつてゐるわけである。さらに、第一種の範疇に屬する貨物といふものは、絶対に再生産できぬ過

去の產物および再生產の分量に絶對の自然的制限をうけてゐる貨物を包括し、それらは事實きはめて少いので、結局リカードが主として論じようとするのは第二の範疇に屬するもの、すなはち勞働によつてその供給を増大することの無制限に可能なもの、そしてその生産も自由競争が制限なしに作用するものだけ、といふことになる。この種の貨物こそは日々の市場で交換される貨物の大部分を占めてゐるのであつて、そしてこの種の貨物の交換價值を支配するのが、ほかならぬ勞働價值の法則だといふことになる。のちに來たる限界學派は、さうした勞働價值の法則が、あらゆる貨物の交換價值の大小および變動の理を一元的に説明しえないことを指摘して、その學理の缺點か弱點かのやうに非難したけれども、科學上の法則といふものは、もともとたつた一つで濟むわけのものでないので、さういふ非難は當らないのである。もし一群の貨物の交換價值を支配する一般法則が見いだされるときは、もちろんそれは把握さるべきであり、それが他群の貨物の交換價值を説明しえないといふことは決してその法則の意義を否定せしめる理由とはならない。いはんや勞働價值の法則が支配する領域が日々市場にあらはれる最大多數の貨物、つまり近代の商品生産社會における一般商品である場合においてはなほさらである。もし、あらゆる貨物の交換價值を一元的に説明する普遍法則を把握することができたら、もちろんそれに越したことはない。限界利用學派はそのやうな普遍法則を發見したと自負するのであるが、しかも一般市場における貨物が、一面において勞働價值法則ないし費用法則によつて支配されるといふ社會的事實は依然として否定すべくもない。しからば、限界利用法則をかくる社會的事實の法則に調和せしめることは、むしろ限界利用學派の當初からの課題であつたとみられぬこともない。勞働價值説は商品の交換價值の大小がその生産に必要な勞働量の太

小によつて左右されるといふ一般的な事實を第一に指摘するものであり、第二にその事實が近代的生産において法則性をおびざるをえないわけを、推理によつて説明するものである。限界學派のみならず、いかなる人も勞働價值説が指摘してゐる事實の一般性を否定することはできないし、また、その事實を一般的に説明するところのリカアドオの推理を否定することはできない。

リカアドオは交換價值成立の基本法則を立てるにあつて、アダム・スミスの文章を引用し、その思想を直接に繼承し、スミスにたいしては批評をくはへながらも、根本の考へ方そのものにおいてはむしろ吟味なしに直觀的にうけいれ、これをもつてかれ自身の考へ方の基礎としたのであるが、しかし使用價值の概念を轉化し、また、貨物の交換價值決定を支配する一原理として、勞働以外に稀少性なるものを擱んだ。たゞその支配領域が鋭くかぎられたものと認め、これを經濟學の當面の課題から除外してもいゝと認めたのである。ところが、さうしたことを理由のあることだとは認めながら、アルフレット・アモンなどは次ぎのやうに考へる。價值が稀少性のみによつて決定される少數の貨物を問題のそとへ除外したのはいい。しかし稀少性の法則そのものの研究までも除外したのはまちがつてゐる。もしリカアドオにして、もつと稀少性の原理を考察したならば、第一類の商品において、價值（交換價值）の形成に決定的な作用をもつところのこの原理は、第二類の商品の價值形成においても何かの作用をもたないわけではないといふことに氣がつかないはずはなかつたらう。稀少性原理の決定的な作用は、まづ第一類の商品において探求さるべきであり、そしてそのやうな推理は、第二類の商品の價值形成にもおよぶべきだつたのだと。かくいふアモンは、いふまでもなく勞働價值思想を否定するものであり、あらゆる貨物の價

値を説明する普遍原理として稀少性を考へるものである。稀少性を價値の普遍原理と考へるものから見れば、リカードのやうな思想、すなはち必要な勞働の投下を惜まなければ一國のみならず多くの國々において、無制限に生産を増加しうる貨物があまねく存在するといふ思想は殆ど荒唐無稽である。だから、アモンは、およそ『無制限』に生産しうるといふやうな貨物のありえないことを、いろいろの方面から論證しようとする。そして絶對的に稀少な財貨といふものは市場で交換される商品の極少部分にすぎないといふリカードの命題に同意するが、『無制限』に増加しうる財貨が市場の大部分をしめてゐるといふ思想には反對する。アモンは勞働投下の可能性が制限されてゐる事實および、勞働せんとする志向が制限されてゐる事實のなかに、勞働の稀少性をみとめ、勞働によつて増加される財貨の稀少性は勞働そのものの稀少性に還元されうること、ならびに、これらの財の價値はまさにその生産に必要な勞働の稀少性によつて決定されることを主張するのである。したがつて、リカードにおけるごとく商品を二群にわかし、兩者の價値を説明すべく、一見して互に關係のない二つの原理（稀少性・勞働量）をかゝげたことはまちがひであるとする。要するに、あらゆる財貨は稀少性のものであり、その稀少性は勞働そのものの稀少性にもとづくものとし、勞働そのものが多種多様であるといふ考、それぞれ稀少の度合を異にするといふ考が、アモンを支配してゐるのである。いつたい、勞働そのものの稀少性といふことに着眼したものに、さきにハインリッヒ・デーツェルあり、またグスターフ・カッセル (Gustav Cassel) では稀少性原理といふものが一貫的にかれの體系を組織する。アモンの思想がこの系統に屬するものであることはいふまでもない。わが國では高田保馬博士がおなじ思想系統に屬してをられる。

すぐにウ・リナム・スタンレー・ジ・ブレンス William Stanley Jevons に移るが、かれの劃期的な著作は、冒頭で意氣軒昂なる揚言をしていはく、――

Repeated reflection and inquiry have led me to the somewhat novel opinion, that *value depends entirely upon utility*. Prevailing opinions make labour rather than utility the origin of value, and there are even those who distinctly assert that labour is the *cause* of value. I show, on the contrary, that we have only to trace out carefully the natural laws of the variation of utility, as depending upon the quantity of commodity in our possession, in order to arrive at a satisfactory theory of exchange, of which the ordinary laws of supply and demand are necessary consequence. This theory is in harmony with facts, and, whenever there is any apparent reason for the belief that labour is the cause of value, we obtain an explanation of the reason. Labour is found often to determine value, but only in an indirect manner, by varying the degree of utility of the commodity through an increase or limitation of the supply.

(The Theory of Political Economy, 4th ed., p. 1)

思索と研究とを重ねたる結果、余は價值は全然利用に基づくとの新説に到著したり。今日行はるゝ所の説に従へば價值の起因は利用よりも寧ろ勞働にして、學者の中には勞働は價值の原因なりと明言する人すらあり。余の主張する處は之に反す。完全なる價值の理論に到達せんとならば貨物の所有量に基づく利用變動の法則を探究するより外に其途なし。此理論は事實に合するものにして、勞働が價值の原因なりてふ説に一見道理ある

が如き場合に於ても、其の然る所以は容易に説明せらる可きなり。然り、勞働は屢々價值を定むるが如く見らるゝ事あり。然れ共、そはたゞ間接の方法に於て即ち貨物の利用を其供給の増加若しくは制限に依て變動せしむるに由て然るを得るのみ。(内外經濟學名著叢書・小泉信三譯『經濟學純理』二頁)

まづ右の一節で注意すべきは、ジェブンスの新學說なるものは、從來の價值學說の存在を辨へることなしに出現したものでなく、十分その存在を知り、しかも、これを覆へさうといふ意氣ごみで出てきたものだといふ一事である。であるから、value depends entirely upon utility といふ時の value とは、決して新しい意味の價值をいふものでなくて、スミス、リカードが意味するところの價值、すなはち交換價值 value in exchange を意味するのである。ジェブンスは舊說の破壊者として登場したのではあるが、幸なるかな、かれは經濟學上の傳統的な『價值』の用語例を破壊してはゐない。およそ貨物の交換價值の大小を決定するものは何か、といふ基本問題にたいし、イギリス正統派の經濟學が久しく眞理として疑はずに支持してきた答を否定し、こゝに唯一の原理として utility をもつてきたのである。だが、右の引用をよく見てゐると、舊學說にたいするかれの反對の態度は、その意氣の旺なりあひに、はなはだ空漠たる感をあたへるものがある。すくなくともリカードの勞働價值說が、いかなる基礎構造をもつたものであるかを、すでに承知してゐるわれわれの目から見ると、ジェブンスが反對しようとしてゐるのは、だれの學說のどの部分であるのか十分にわからない。たゞ、勞働價值說にたいして正面からの反對者たる姿勢をとつてゐるやうすだけは、右の一節から早速看取できるのである。また、かれの新學說の内容がいかなるものであるかは、『利用變動の自然的諸法則』の研究といふ言葉を通じてうかがはれるのである。この法

則が限界利用法則を意味するものであることはいふまでもない。

さて、第四章の第四節で、つぎのやうに述べる。――

In the popular use of the word value no less than three distinct though connected meanings seem to be confused together. These may be described as

- (1) Value in use;
- (2) Esteem, or urgency of desire;
- (3) Ratio of exchange.

Adam Smith, in the familiar passage already referred to, distinguished between the first and the third meanings.

普通價值なる語が用ゐらるゝ場合には少くとも三つの異なる意味が混同され居るが如し。即ち、

(一)使用價值・(二)尊重、若しくは欲求の強さ・(三)交換比率是なり。アダム・スミスが第一の意味と第三の意味とを區別したる事は既に人の知る所なり。(前出那譯八七頁)

と、つゞいて、『價值なる語は二つの異なる意義をもつ』云々の有名な一節がアダム・スミスから引用される。水とダイヤモンドが比較されてゐる例の箇處である。再びこゝに引用しないから、讀者は最初に引用したおなじ箇所(七頁)を必ず参照されたい。その引用につゞいて、ジュレンスはいふ。――

It is sufficiently plain that, when Smith speaks of water as being highly useful and yet devoid of purchasing power, he means *water in abundance*, that is to say, water so abundantly supplied that it has exerted its full useful effect, or its *total utility*. Water, when it becomes very scarce, as in a dry desert, acquires exceedingly great purchasing power.

茲にアダム・スミスが水は非常に有用なるも、猶且購買力を缺くと云へる場合の水は充分多量に存在する水の意味なる事疑なし。換言すれば、此場合の水は供給充分にして、其有用なる效果の全部、即ち總利用を發揮したる水の意味なる事明かなり。水と雖其供給甚だ缺乏せる場合にありては、沙漠中に於ける如く、極めて大なる交換力を有するに至るものなり。(前出邦譯八八頁)

すなはち、ジエンスの解釋にしたがへば、スミスの使用價值 *value in use* といふは、欲望が十分に満足されて最終利用度が低下し切つてしまつた物の總利用 *total utility* の意味に外ならないのである。しかし、このやうな解釋が必ずしもしつくり當てはまるものでないことは、すでにスミスの著作に即して説明したところによつて明かである。われわれの解釋では、スミスの使用價值概念はまだ科學性を獲得してゐなかつた。つゞいてジエンスはいふ。――

By purchasing power he clearly means the ratio of exchange for other commodities.

又彼が謂ふ所の購買力は、明らかに他物に對する一貨物の交換比率を意味するものとす。(同)

そこで、スミスにおける二つの価値概念を表す言葉、value in use, value in exchange は、それぞれジェンズの分類における第一および第三に一應歸着せしめられたわけになる。しかるに、スミスにおいて看過されてゐるのはジェンズにおける第二の価値概念すなはち『尊重、若しくは欲求の強さ』Esteem, or urgency of desire であるといふことになる。いはく、――

I am led to think that the word value is often used in reality to mean *intensity of desire or esteem for a thing*. Even Robinson Crusoe must have looked upon each of his possessions with varying esteem and desire for more, although he was incapable of exchanging with any other person. Now, in this sense value seems to be identical with the final degree of utility of a commodity,

余は価値なる語が屢々一物に對する欲求尊重の強さの意味にて用ゐらるゝ事を思はずんばあらざるなり。……他人と交換を行ふ事能はざるロビンソン・クルーソーと雖、必ずや其所有物の各個に對し種々の程度の尊重欲求を感じ居たるに相違なし。此意味に於ける価値は余の目に依れば……貨物の最終利用と同一のものにして、…… (同八九頁)

こゝに“the final degree of utility”とあるは、のちにマーシャルによつて“marginal utility”と改められたものである。意味は全くおなじだ。さあ、そこで、この限界利用とジェンズにおける第三の価値概念たる『交換比率』すなはち交換価値とのあひだに關係があるかといふに、しかり、密接の關係ありとして、かれはつぎのごとく説く。――

No doubt there is a close connection between value in this meaning, and value as ratio of exchange.

かうしてスミス、リカードオにおいて二つしかなかった価値概念が、ジェブンスによつて三つに展開された。しかし、『交換価値』といふ概念は依然としてもとのまゝなのであるからして、變化がおきたのは使用価値の概念であるといはねばならない。ジェブンスはこれまでの使用価値概念に満足せず、限界利用（かれは最終利用度といつた）といふ概念を新たにつかみ、それをもつて交換価値と密接の關係あるものと信じたのである。リカードオにおいて、『使用価値』すなはち『利用』は、交換価値の成立に絶対に缺くべからざるものであるとは認められなければ、使用価値のそれ以上の分析はおこなはれず、交換価値と使用価値との量的な一定關係といふ問題にふれるところがなかつた。いま、ジェブンスがきりひらくことのできたのは實にこの点である。かれはリカードオの『利用』を『全部利用』と『限界利用』とに分解したのである。しかし、かれはリカードオによつて遺された問題をみづから解いたのだとは考へないで、新たに經濟學を建てなほすことが自分の任務であると信じてゐるやうな著述の仕方をしてゐる。かういふ態度はジェブンス一個人の功績を華々しく世人に認識させるのには役だつたとしても、經濟學研究の領域に不必要な混亂をみちびきいれたといふ點では、非難されるときも歡迎さるべきことではない。その混亂を救つたものがマースシャルであつた。しかるにジェブンスの著作を注意して讀む讀者が不思議に感ずるのは、第四章交換理論の最後の一節である。見よ、この新説唱道者はそこで舊學說との妥協を志してゐるやうに思はれるではないか？――

The preceding pages contain, if I am not mistaken, an explanation of the nature of value which will, for the most part, harmonise with previous views upon the subject. Ricardo has stated like most other economists, that utility is absolutely essential to value; but that "possessing utility, commodities derive their exchangeable value from two sources: from their scarcity, and from the quantity of labour required to obtain them." Senior, again, has admirably defined wealth, or objects possessing value, as "those things, and those things only, which are transferable, or capable of being passed from hand to hand, we find that two of the clearest definitions of value recognise *utility* and *scarcity* as the essential qualities.

もつと引用を長くする方がよいのだけれど、これだけにして、いきなりジ・オレンスの調和論の骨子と見えるところへ飛ぶ。——

But though labour is never the cause of value, it is in a large proportion of cases the determining circumstance, and in the following way:— *Value depends solely on the final degree of utility. How can we vary this degree of utility? — By having more or less of the commodity to consume. And how shall we get more or less of it? — By spending more or less labour in obtaining a supply.*

さて、この意味を表でもつて示すと稱して、ジ・オレンスは『生産費は供給を定む、供給は最終利用を定む、最

終利用は價值を定む。』と三つの命題を三行に分けて竝べたのであるが、これでは貨物一單位の生産費を決定するものが何であるかが判らないといふよりも、一貨物の供給量を決定するものが何であるかが判らないのである。供給量が増大して貨物の限界利用が低くなることはよくわかるけれど、供給量の大小を決定するものが勞働費用の大小であるといふのは、それだけでは譯のわからないことである。第一、このやうな順位的な連鎖の方法そのものが科學的に承認すべからざるものであることはマーシャルの指摘するところである。だが、さういふマーシャルもまたジェンズの三行詩を改作して、みづから順位的な因果關係の連鎖をこしらへてみせたのである。利用・費用・價值の因果關係についてのジェンズとマーシャルの見解の相異は、畢竟われわれから見ると格別のものではない。兩者ともに限界利用法則の適用に關しては或る重大な一點を看過してゐたのであつて、それがために兩價值學說の調和の方法においても、何かしら割りきれないものを残さざるをえなかつたのである。

6

それはとにかく、綜合者としてのマーシャルの態度ぐらゐる、全體として興味にみちたものはない。經濟學は抽象的な理論を實體とし、その理論は文章でもつて記述されるのを普通とするので、數學などところがつて、理論を跡づけるには、その文章を慎重に分析的に讀まなければならず、しかも文章といふものは或る種の思想の表現には不完全・不適當なものであり、ことに著者の才能に依存するのであるから、いつも文章に表れただけでもつて、そのまゝ著者の思想全體がうかがへるものと考へてはならない。もし簡々の著作の研究ではなく、一人の理論家

の思想の全振幅を、かれの内面に立ち入つて見きはめようといふつもりなら、手のとゞくあらゆる材料にもとづいて、最も眞に迫つた輪廓を引かなければならない。すなはち、あらゆる問題についてのかれの考察の射程を、あたかも陸上競技のレコードをとるとおなじやうに、いくつもの記述のなかの最高の表現を選択して決定するのである。マーシャルがリカアドオの價值論を理解しようとする態度は、まさにそれであつた。このやうな美事な方法は、リカアドオをジェフランスの攻撃から擁護する必要がないのだつたら、マーシャルの企圖するところとならなかつたかもしれない。が、また、ジェフランスの新しい業績が側面から光を投げてゐてくれなかつたら、いかにマーシャルといへども、リカアドオの價值論のあの輪廓の曖昧なすみすみまでを、あゝも入念に探索することは、思ひおよばなかつたことであらう。いづれにせよ、リカアドオにおいては、豊かな直觀を踏まへつゝ、まだ十分に的確に意識されず、理論化されず、しかし漠然として一定の思想に接近しつゝあつたといふ形跡が、著作の各處および斷簡零墨の援用と照合によつて證明されてゐるので、そのやうにしてマーシャルの手で描きなほされたりリカアドオの價值論といふものは、むしろジェフランス理論の未成熟なる先驅者であるやうな一面を帯びてくるのである。この獻身的ともいひたいやうなマーシャルのリカアドオ擁護論がなかつたなら、イギリス經濟學の傳統は、こゝでぼつりと切れたかのやうな印象を人々にあたへたかもしれないなかつたものを。

マーシャルはいふ、われわれがかれを正解しようとするには親切に解釋せねばならぬと。かれの言葉が曖昧な場合には、他の著作のどこかを探して、その眞意がどういふことであるかをたしかめてやるだけの親切をつくせば、通常その説の誤謬であると認められてゐる點の多くも誤謬でないことがわかるのだと。——『たとへばかれ

は利用をもつて價值の測度とはしないが價值に「絶對に不可缺」であると考へてゐる。他面「非常に量の限られた」物の價值は「これが所有を欲する人の富と愛好心によつてちがふ」と考へてゐる。また別の箇所で價格の市場變動が一面に販賣のための量と他面に「人類の欲望と願望」とによつて定まるゆゑを主張してゐる。さらに深遠な——但し甚だ不完全な——「價值と富」との區別論のなかでは、限界利用と全部利用との區別を認めかけてゐるやうにおもはれる。けだし、かれの富 *Riches* といふ言葉は全部利用を意味してをり、且つもう一息で左の叙述に到達するばかりになつてゐたやうにおもはれるからだ。すなはち價值といふものは買ひ手の買ふ貨物のうち辛うじて買手の利益となるにすぎぬ部分から生ずる富の増加分に一致すること、および供給が減少すれば……價值で測定される富の限界増量は増大し、同時にその貨物から生ずる富の總體すなはち全部利用が減少することこれである。かれはその議論の全體を通じて供給阻害による限界利用の増大と全部利用の減少とをいはうとしてゐる。』と。すべてがマーシャルの吟味のとほりだとすれば、リカアドオは一面的といふよりも、ずつと全面的に價值問題に接觸してゐたことになる。だが、こゝでは主としてジエンスとの對照によつてマーシャルのいふところを聽かなければならない。『近代の學者のなかでジエンスのごとくリカアドオの輝かしい獨創性に近づいたものは少い。しかしかれはリカアドオとミルの兩者を苛酷に判定しその説を偏狹に解しその科學性を低下せしめ兩者の眞價をそこなつたかとおもはれる。かれは兩者があまり重要視しなかつた價值の一面を高調しようとした。かれが「反覆熟考のする價值は全然利用に依存すといふ些か斬新な見解に到達した」といつたのも、おそらくその理由はある程度までこゝにある。リカアドオは不用意に言葉を簡潔にしたため往々偏狹の叙述に墮

し、價值は生産費に依存するといふにいたつた。しかしこれはこの叙述をもつて一層包括的な學說の一部と見ただけで、その以外の部分をも説明しようと試みてゐるのである。ジェブンスの右の叙述をリカアドオのこの叙述に比べれば、一面的斷片的な點ではリカアドオにおとらず、誤解を招きやすい點ではリカアドオ以上である。』と。では、例の公式化されたジェブンスの中心命題をマーシアルはどう批判してゐるか？

もしあの一連の因果關係が眞實存するものならば、三命題の中間命題を省略して、生産費は價值を決定するといつても差支ないことになるわけだが、第一さうした一連の前後の successive な關係は存在しない。ジェブンスの叙述は供給價格・需要價格・生産費をもつて相互に他を決定するものとしなないで、順次に一が他を決定するものとしてゐる。あたかもABCの三球が鉢のなかに相寄つてゐる場合、この三球が引力の作用のもとに互に他を決定するといはずに、AはBを、BはCを決定すると説いたも同様である。だが、逆にCはBを、BはAを決定するといつても正しいであらう。すなはちジェブンスにたいする答として、かれの公式の順序を轉倒すれば、かれの因果連鎖よりも眞理に近い連鎖をつくりうると、さうしてマーシアルは次ぎのやうな公式をかゝげる。――

利用は供給さるべき量を決定する。

供給さるべき量は生産費を決定する。

生産費は價值を決定する。(マーシアルの引用は、すべて大塚金之助譯による。)

だが、リカードの理論に近寄らしめようとしたこの公式は、マーシャル自身が否定する因果連鎖の一種にすぎず、利用と費用との掛け合ひみたいな論法の對比で、リカードとジェンズの理論の優劣を論ずるのは、いままさら意味のあることとは思へない。結局マーシャルの綜合説は次ぎの叙述におちつく。『生産費原理』と「限界利用原理」とは疑もなく一切を支配する一需要供給法則の構成部分である。その各々は缺の一方の双にも比ぶべきである。一方の双を動かさず他の一方を動かして物を載る場合には、物を載つたのは第二の双であると簡潔不用意にいつていい。しかしこの叙述は正式な——したがつて熟慮的に辯護さるべき——叙述ではない。』と。マーシャルの綜合説の要旨を語るこの叙述は、『經濟學原理』第五篇三章および第九附録の双方に見えてゐるが、こゝでは後者から引いた。前者では『價值（交換價值）が利用によつて支配されるか生産費によつて支配されるかを論ずるのは、缺の上双が紙を載るか下双が載るかを論ずるに等しからう。』云々といつてゐる。それは貨物の交換價值の大小を決定するうへに作用するものは、短期では主として利用であるが、長期にわたつて見れば主として生産費だといふことを説いた一節である。つまりリカードの價值論は本質的には何も失ふところはなく、ジェンズの價值論は前者が閑却してゐた需要面の研究に新生面をひらいたものにすぎないといふのが、マーシャルの根本見解なのである。だからこそ、すでに別な機會に指摘したやうに、マーシャルは一方では依然として古典派の古い傳統にしたがひ、單純な商品生産社會を想定し、勞働價值の法則がその交換社會を支配する姿を、疑ふところなしにイギリス經濟學特有の表面描寫でもつて、ゑがきだしてゐるわけで、その場合、ジェンズの新理論などが介入してくる餘地は與へられてゐないのである。そこで、もし單純な經濟靜態の體系か

ら限界利用法則が排除されてゐるのを見ることに、なにかしら飽きたらなさをわれわれが感じるとすれば、マールシールの綜合説は、もう一步前進展開せしめられなくてはならないものではないかといふ考がわいてくる。貨物の交換價值を決定するものが勞働量であるか利用であるかといふ問題に答へるのに、長期短期に答を區分せず、いきなり限界利用法則の靜態（「長期」といつてもいい）における全幅的作用を摘出するといふやうな方法が残されてゐはしないだらうか、——と、これが最後に遺された課題となるわけである。

もし近代價值學説の綜合が、その理論上純粹に可能な範圍で、完成されたといふ印象をあたへるのに、マールシールの勞作が何かしら一分の物たらなさを残したとすれば、その理由は、繰りかへしていふが、單純な交換社會の靜態をゑがく場合に、舊態依然として勞働價值説の説明方法をもつてし、限界利用説に介入の餘地をあたへなかつたといふ事情にあるのではあるまいか？　もし、さういへないならば、次ぎのやうに言ひなほすことによつて、こゝにいふ主旨を一層徹底せしめることができる。——單純な交換社會における靜態の假定のもとにおいて、勞働價值法則と限界利用法則との、同時的な、むしろ一如としての作用を、一體系として表現することができさへしたならば、マールシールはかれ以後の學界になほ『未決問題』ありといふ印象を遺さずに済んだであらうと。だが、事實、それはジエブンスに望みがたいやうに、マールシールにも望みがたい一事だつた。こゝに興味があるのは、たまたま同問題の處在が福田徳三博士の論策によつて夙にわが國の學界に紹介され、爾來若干の研究者を刺戟しつゝあつたといふ事實である。たとへば、研究の出發點において幾年か同博士の薰陶のもとにあつた一人である小泉信三博士が、價值問題に關する思索の跡を久しい歲月にわたつて徐々に展開しながら、つひに最

近（一九三四年）にいたつて一つの到達點を示してゐるがときである。小泉博士の到達點については後段でも一言觸れるが、右にいふ靜態における限界利用法則の適用におよんだものと見ることもできるのである。

7

アダム・スミスにおいて使用價值・交換價值の兩概念がどういふ風に竝立的に成立したか、兩者の關係がどう説明されたか（——それは殆ど説明されなかつた）、リカアドオはスミスの兩概念をどう繼承したか、そしてスミスの使用價值概念をどう轉化し、使用價值と交換價值との關係を新たにどう説明したか、ジェフンスは使用價值概念をどう分解して二つにわけたか、そして交換價值と一定關係にある使用價值といふのは、どういふ性質のものであると説いたか、それらの諸點は以上でもつてほど眺めつくされた。注意すべきことは、二世紀にわたるこれらのイギリス學者がリレー式に先人の業績を承けつゝ、肝要なところは必ず原文を引用し、自他の思想の接觸を實に密着せしめることによつて脈々たる理論史を生みだしてゐるといふ事實である。リカアドオ批判・新説建設の態度で登場してゐるジェフンスですらも、よく見るとリカアドオの理論に密着してゐるのである。スミスからジェフンスにいたるまでの使用價值概念の發展こそは、近代價值論史の發展の一面であるが、このことは他方において交換價值概念の不變を前提してゐる事實を見のがしてはならない。ジェフンスは交換價值を交換比率と呼びなほさうと提議したけれども、經濟學の研究對象が交換價值であることを疑つたのではなかつた。使用價值・全部利用・最終利用といふやうなものは、たゞ交換價值の現象を説明する道具としてのみ重要なのである。

しかるに、もし價值論者が、交換價值を對象ともせず、交換現象の分析を主要目的ともしないといふことになれば、その價值理論なるものは、いつたい、どういふことになるのか？　すくなくともイギリス經濟學の傳統内では、いかに學說の紛争がつゞいたにしても、研究主題が交換價值であるといふ一點において、微塵のくひちがひもなかつたのであるから、いかに立場を異にした研究でも、科學性をもつたものであるかぎり、たれか出てきて、それらを綜合することができたわけである。だが、もし經濟價值論の名において、哲學上の價值論史と交渉をもつやうな『經濟價值』の概念をこしらへあげ、それを一つの世界觀的體系に包攝しようなどといふ企てが起つた場合には、いかに偉大なる綜合論者が出現したところで、さういふ經濟價值論をリカードやジェンズの理論と結びつけることができるだらうとはおもへない。事實、イギリスの學界にはさういふ『經濟價值』論といふものはないのであるが、そのやうな價值論はドイツ語の系統から生じ、なかんづく日本の學界において、それが近年不思議な果をむすばうとしてゐるのではないかとおもはれる。われわれの興味は、さうした日本學者の一面哲學的な『經濟價值』論が、學者自身によつて今後どうイギリス經濟學とむすびつけられるだらうかといふ點にかゝつてゐるが、しかし一層興味ある問題は、さうした哲學的な『經濟價值』論を基礎にして成立すべき理論經濟學の體系といふものは、いつたい、どんな形のものになるのだらうかといふことである。この國の初心の研究者のなかには、(教師としての幾年かの經驗からいふのであるが、)經濟學に手を染める匂々、『價值の難問題』を自分で解いてみるのだといふやうな意氣ぐみで、すぐさま認識論とか方法論とかいふものに走つてゆき、あるひは『價值』といふ言葉の正しい意味が何であるかを解決することが經濟學の根本問題であるかのやうに一途に

思ひこんで、空虚な思辨に終始するものもあるが、青年學生にあらはれるさうした心理は、日本の經濟學の現狀を反映してゐるものと見なければならぬ。

初心の研究者にとつて第一に必要なことは、しかし、自分で科學上の問題を提起することではなく、いはんや自分でそれを解決することではなくて、みづから一步踏み入らうとしてゐる科學は、何を目的としてゐるかといふことを十分に知ることである。それを知らうとおもへば、第一に就くべきものは科學の古典である。科學の成立を告げた古典ほど研究對象と研究の基本動機がいきいきと勁拔に表現されてゐるものはないからである。このことはスミスおよびリカードにおいて、またカール・マルクスにおいて、いちじるしく鋭く認められるところである。科學者は眼をみひらいて現象のまへに立つ。科學者が追究しようとするのは現象の理論化であり、内面的關聯の系統化である。科學的諸概念はそのための道具にすぎない。目的は道具の整備ではなくて、分析の達成である。しかも、目的そのものは科學者の知的意慾によつて形成されたものであることを忘れてはならない。この知的意慾または科學的動機が、どういふところに根をすゑてゐるかを見ないで、書かれたる體系としての經濟學原理を読み走することは殆ど無意味である。教科學的な著作の弱點は、讀者にたいして一つの體系の殻をあたるばかりで、科學的動機の深淵の中に讀者をめざめさせがたいところにある。およそ學校教師の講壇からの講義も、それにちかい。科學的動機の反省は、方法論的反省などより一層根本的なことからであるけれど、このことは講壇において忘却されてゐるのである。三角形の内角の和は二直角にひとしいといふユークリットの命題は、中等學校の生徒にとつて、もうそれだけで眞に新らしい知識である。しかるに幾何學はそれを『證明』することを目的

としてゐるではないか？ それを證明するのが幾何學であるといふことは一應示しても、そのやうな證明を求めねばやまぬ知的意慾・科學的動機の火を少年たちの胸に點すことはできない。それは天才の胸にのみやどる燈火である。教師はせめて、その動機の所在と性質とが、どんなに一般的な通俗的な知識の欲求から高く遠く離れたものであるかをみづから省み、一言、學生にも注意すればいいのである。經濟學のやうな、實生活に最も密着してゐるとみえる研究の領域ですら、その理論的作業の根本動機が純粹に科學的のものであることを、したがつてその動機に參ずることが普通に考へられてゐるより容易ではないといふことを、學生に反省せしめるのも、方法論に先立つての教師の任務のやうにおもはれるのである。

經濟學の本原的な研究は、（他のいかなる經驗科學でもさうであるが、）いつも直接の對象が外界の現象であつて、書かれた書物ではありえない。しかるに實驗方法をもたないこの科學では、文獻を讀むことがすなはち研究であるといふ錯覺を起さしめる弊が實にはなはだしい。研究者は既存の文獻にしがみつき、他人の概念構成物の上を渡りあるいて、あちこちと他人の細工に文句をつけるのが研究であると考へる。だが、あらゆる學理の窮極の審判者はむしろ事實そのものであり、事實と矛盾する一切の學説は崩壊せざるをえない。しかるに事實は直觀（經驗・觀察・觀測・實驗）を通してのみわれわれに映るのであつてみれば、科學者の頭腦の豊かさは、つまるところ、直觀の世界の深さと廣さに歸するのだといつて、決して言ひすぎではない。この理論的科學の領域内でも、研究者が終始踏まへてゐなくてはならないものは、直觀の世界（事實の世界）であり、研究者は間斷なくその直觀世界と抽象的理論の世界とのあひだを、光のやうな迅さで往復しなければならぬ。觀察力を伴はない推

理力が、騎手を落した馬のやうに空虚な思辨の世界に空驅りをしてゐる實例は屢々見るところであるが、それらの思辨家はイギリスのA學者の概念構成物からドイツのB學者の概念構成物へと、いはゞ古着屋を軒竝みにひやかして歩きまはつてゐるやうな形であつて、自分の肉體といふものに合はせた衣服をもたず、ひよつとすると肉體そのものをもたないのではないかと疑はしめるものさへあるのである。思想系統を異にする各國の經濟學が流れこみ、さうして大渦小渦をまいてゐるやうな状態から免れることのできない運命にある日本の學界は、期せずして右のやうな思辨を産むのに最も適した溫床となつたわけであらうが、かうした現状が成立するまでの歴史的考察は別の機會にゆづらなければならない。

8

これで、この一文の目的とするところは、ほど述べつくした。すでに述べたことのなかには、先觸れした主要目的を越えたところも二三あつたとおもふが、讀者の咎めをうけなければ幸である。たゞ、價值問題を離れて、經濟學の研究態度および方法に關して、きはめて初歩的な、教師風な語調をおびた談義を、ところどころに挿入したことは、一部の讀者にとつて迷惑至極であつたかもしれない。それも筆者が現に學校教師であるといふにかんがみて、宥恕していただければ幸である。實は、こゝに述べたことの大部分は、近年、經濟學史の講義時間中に、生徒に講述しつゝあることの一部分なので、——しかし、かうした初歩的な問題についての卑見を、一端なりとも學界にむかつて披瀝することは、多年の希望でもあつたのである。といふのは、およそ初歩的なものは同時

に基本的なものである、といふ意味において、この點に關する卑見のなかに、あらゆる他の問題に關する卑見の足場があるとおもふからである。この一文は、さういふことからいへば、地下に埋まつてゐるその足場を敢て示したものだといふこともできる。ミスからリカードオにいたる『使用價值』概念の發展に關する見解や、利用・費用・價值の三つの關係についてのジェフンスおよびマーシャルの説明の不足を認める見解などについては、たゞ學界の批判をまつよりほかはない。しかし、イギリス經濟學における價值論が終始一貫してめざしたのは、『交換價值』現象の一般的説明であり、のみならず、その語義はアダム・ミスからマーシャルにいたるまで微塵も動搖をみず、轉化發展したものはたゞ『使用價值』の概念であつたといふ一事は、特に一般の注意をうながしたい。貨物の交換價值の大小および變動を説明することは、イギリス經濟學の傳統的課題であつて、ジェフンスといへども、畢竟この傳統的課題のそとに新しい課題を提起したものではない。

もし、經濟學者が價值論の名において、交換價值の現象を分析するのでなくて、『經濟價值』の概念を事新たに構成しようといふのなら、まづ、さうしなくてはならない理由を説明すべき義務を負ふであらう。のみならず、これまでの交換價值論と自家の『經濟價值』論との一定の理論的關係をも説明すべき義務を負ふであらう。價值論上に何等か『未決問題』ありとの漠たる感銘のもとに、多くの學者がおのがじし自家の『經濟價值』論を打ち出すのは、徒勞のやうにおもはれてならない。この際、哲學に走ることは、その徒勞のうちの最大のものであると思はれない。一例をもとめれば左右田喜一郎博士の價值論であるが、同博士もまた小泉信三博士とおなじやうに、研究の出發點において幾年か福田博士の影響のもとにあり、價值問題について、同じやうな刺戟をうけ

た一人とみることが出来る。小泉・左右田兩博士は、いはゞ禪師福田博士から同一の公案をさづかりながら、非常にながつた二つの方向へすみ、そして、何等かの結果に到達したとみえるは、一方だけのやうなのである。

價值問題についての往年の福田徳三博士の提言には、禪臭めいたものが漂つてゐる。——『折衷は飽迄折衷にして混合は飽迄混合たるを免れず、マージナルは面白き譬喩を作りて云ふやう、費用か利用かと云ふは詰りは鉄の兩双の如し。双二つなければ物は切れず、乍去一雙は動かす一雙のみ動くことあり兩双とも動くことありと。鐘が鳴るか撞木が鳴るかとは昔しの人も云へり。されども價值の問題は鉄にて物を切り撞木にて鐘を叩くが如きこととなりや予は之を疑はざるを得ず、此の場合もあり彼の場合もありといふは、所謂兩成敗にて公平には相違なけれども、學問の根本觀念が斯くの如く他愛もなきことにて定めらるゝとせば、學問の用も亦甚だ少しと感ぜざるを得ず。』と。だが、おそらく日本經濟學のあらゆる文獻を通じて、次ぎの一節ほどセンセーショナルなものを、われわれは知らない。——『我等は今十字街頭に立つ。費用の道に就かんか利用の道に赴かんか、價值なる「スファックス」は此謎を提げて我に迫る。謎釋けずんば前進に由なし。餘剩價值論は費用の道に就かず利用の道に馳らずして、別に行く可き道を示すものならざるか。マルサスの Labour commanded ゴッセンの二法則は此道を指示するものならざるか。リカルドは其「價值論」に教へざりしものを却て「地代論」に於て教へしにあらざるか。タムソンが創案しマルサスが利用したる Surplus or additional value は、此研究に基礎を與へしものにあらざるか。是れ予が更に考究を進めんと欲する所なり。』と。實際、價值問題解決の道として、博士が餘剩價值論の構想を久しく抱懷されてゐる、晩年、最後の一論において、その思想を止揚されたことは、他の機會に指摘したとほり、

また、宮田喜代藏教授において、その思想の一繼承者を見いだしうることも、おなじ機會に述べたとほりである。だが、いま、その點には觸れがたい。『謎釋けずんば前進に由なし』といった福田博士の心構へが、實にそのまゝ左右田喜一郎博士の心構へともなつたことは、同博士の勞作『未定稿價值論の一節』（左右田喜一郎著『經濟哲學の諸問題』所輯）を読めば明かである。しかも、左右田博士は認識論上に主觀・客觀の兩派あることから『逆行して』、經濟學の價值論上に同様の兩派あることを當然なりとし、經濟價值論の困難と認識論の困難とは同一の困難にして哲學・經濟學共同の負擔であると立言したのである。この一投石が、その後、日本の經濟學界にどのやうな思辨家の一系列を波紋狀に擴がらしめるにいたつたか、——さきに、文化主義的世界觀で裏づけられた『價值の體系』を從來の價值理論の地位に入れかへようとする一傾向がこの國にあると指摘したのは、まさにこの系列以外のものを指すのではない。

いふまでもないが、小泉信三博士の思想の方向は全く右の系統以外にある。同博士は『價值』といふ用語の意義に關してはカール・メンガー（Carl Menger）の定義によらうとされる。そのことはしばらく問はず、まづ勞働價值説と限界利用説とは矛盾せずといふ調和的見解を述べて、つぎのやうに說かれることに注意したい。——『假りにロビンソンが完全に合理的に行動し、而して生産の數量は任意に如何なる微量づつでも増減し得るものとする。斯く假定すれば、諸財貨の價值即ち限界効用は、その生産に費さるべき勞働量に比例する、といふことが出来る。……右に私は、財貨の價值は費さるゝ勞働に依て測られると言つた。これは固より新たに生産し得るものみに就いて言はれるのであるが、而かも斯くいふことは、決して財貨の價值が限界効用に依て定まるとの命題

と抵觸するものではない。價值は何處までも限界效用に由て定まるのであるが、たゞ勞働は、勞働費用が限界效用と並行するやうに諸財の生産に配當「配分」されるに過ぎないのである。』（『價值・價格・勞働』改造第一六卷第六號）と。一見して、こゝにはロビンソン經濟における勞働價值原理と限界利用原理との調和が説かれてをり、そして調和の鍵はロビンソンの勞働配分における合理性にかゝつてゐるやうに見える。ところが、こゝに小泉博士のいはゆる『價值』とは、交換價值ではなくて、メンガーのいはゆる『價值』つまり『限界效用』そのものである。しからば、かゝるロビンソン理論を兩價值學說の調和を説く假設として認めることはゆるされない。同博士は、もちろんロビンソン物語にとゞまつてはをられない。つゞいてこの理論を共產主義經濟の理論に發展せしめられるのであるが、問題の『價值』は交換價值ではなくて、『社會的評價』なのである。では、交換經濟ではどうであるかといふに、そこでは『たゞ稍々擬制的に、或は *equative* に、社會の評價と稱し得べきものがないのではない。價格の成立が即ちそれである。』といふ。價格は財貨にたいする社會の評價の表現だといふのである。おもふに、この考のすゝめ方はすでに多少イギリス經濟學の傳統から外れてしまつてゐる。事由はかうである、——小泉博士は價值問題の解決に關聯して『價值』なる用語の意味を決定することが、肝要な一事であるかのやうに思ひ込まれた。この考は實は福田博士のお考へでもあつたのである。

さうである。しかし、アダム・スミスからマーシャルまで、過去二世紀にわたりイギリス經濟學の傳統内に發展した價值問題は、交換價值の説明といふ問題だつた。そして、價值または交換價值といふ用語は、前後を通じて一定不變の意味を維持したのであつた。（一九三三—一九三六）